

# 教材開発例 1 「ゆめにむかって—栗原恵選手のゆめ—」くりはらめぐみせんしゅ

〔小学校中学年 主題：ゆめにむかって 内容項目：1の(2)〕



栗原恵選手は、江田島市能美町出身のバレーボール選手であり、全日本（火の鳥 NIPPON）チームの副キャプテンを務めるなど活躍している。

小学校4年生からバレーをはじめ、高校時代にはインターハイ・国体・春の高校バレーに優勝し、三冠を達成した。さらに、夢だったアテネ、北京のオリンピックにエースアタッカーとして連続出場し、それぞれ5位に入賞を果たすなど多くの実績を残している。



## (1) 素材の収集・選定



### 集めてみよう

市内の小・中学校の道徳推進担当教師の方に、スポーツに関して道徳資料となりうる素材について協力を求めて収集した結果、「地域在住のマラソン愛好家」「地域在住のトライアスロン愛好家」「バドミントン：オリンピック審判員」「水泳選手：河石達吾選手」「バレー選手：栗原恵選手」の素材が集まった。この中で、現役で活躍しているアスリートであり、児童にとって身近な存在であるのは、「栗原恵選手」である。

栗原選手は、オリンピックに2回出場しており、江田島市で壮行会が開かれたこともある。また、母校の小・中学校やジュニアバレーチームを訪問したり、市内の各校に直筆の色紙を送ったりしている。そこで、中学年を対象とし、夢をもち、その実現に向けて努力する前向きな生き方を考えさせ、「今よりよくなりたいと願い、努力する」姿について考えを深めていけると考え、素材として選定した。

## (2) 情報の収集



### 探してみよう

#### ○ 地域の関係者（お母さんへのインタビュー）

栗原選手の著書「めぐみ」を読んだ上で、子どもの頃のエピソードや具体的な会話の内容について、聞き取った。また、卒業文集、ジュニアバレーチームの文集をお借りすることができた。また、今の栗原さんの夢が描かれている書籍『「アスリートの夢 26人のアスリート×きむ」を紹介していただいた。

#### ○ 一般書籍（「めぐみ：実業之日本社」「アスリートの夢 26人のアスリート×きむ：いろは出版」）

栗原選手が生まれてから、オリンピック選手になるまでの出来事や思いが描かれており、中学校で転校を決めるまでの出来事や思いについて参考にした。また、小さい頃からの「オリンピック選手になる」という夢を果たした栗原選手の「次の夢」について描かれており、常に夢をもち、前向きに生きるすばらしさを資料の中でも生かし児童に伝えたいと考えた。

#### ○ 情報通信ネットワーク（インターネット）

栗原選手の公式ホームページ、アスリートインタビュー（フジテレビホームページ）を参考にした。

※ 小学校時代の写真の肖像権については栗原選手のお母さんに了承をいただき、また、一般書籍を参考にする際の著作権については、出版社に問い合わせた。



### (3) 読み物資料の作成



書いてみよう

#### ① 主題やねらいを決定する

小学校解説では、夢や希望について、「児童が自立し、よりよく生きていくためには、何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。しかし、それは見通しもなく取り組むのではなく、よりよい自己を実現しようとする向上心と結び付いてこそ、前向きな自己の生き方が自覚されてくるといえよう。そのためにも、児童がより高い目標を立てたり、自分としての夢や希望を掲げたりして、その達成や実現への志をもち、勇気をもって取り組むことができるようにすることが重要になる。」とある。

また、中学年の段階においては、「自分がやらなければならないことだけではなく、更に自主性を発揮し、自分でやろうと決めたことに対しても積極的に取り組み、粘り強くやり遂げる精神を育てることが大切になる。そのためには、あきらめずに取り組むことの意義や、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていくことが求められる」とある。「心のノート」の関係ページには、キーワードとして「『今よりよくなりたい』という心をもとう」と示されている。

これらを確認し、「栗原恵選手」を素材として、資料を作成するに当たっては、夢や希望にねらいを焦点化し、児童に、自分の好きなこと、夢にむかって前向きに生きていくことのすばらしさを感じ、そのために努力していこうとする気持ちを育てるために、転校を決めるときの恵さんの思い悩む姿を描くことが大切であると考える。

#### ② 対象となる学年の発達の段階や特性を把握する

栗原選手は、現役で活躍しているバレーボール選手であり、児童にとって身近な憧れの存在である。バレーボールについては、ほとんどの児童が見たことがあり、ルールもある程度理解できているが、選手としてプレーした体験があるわけではないため、専門用語の使用については、配慮が必要である。

#### ③ 登場人物や状況の設定する

〔具体的な場面設定と登場人物〕

○主人公 栗原恵さん

○補助的な人物 お母さん

- ・ 悩んでいる恵さんの話を聞き、後悔しない進路を決めるよう話す。

○その他 お父さん

- ・ 幼い頃から、恵さんに厳しくバレーを教える。

#### ④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

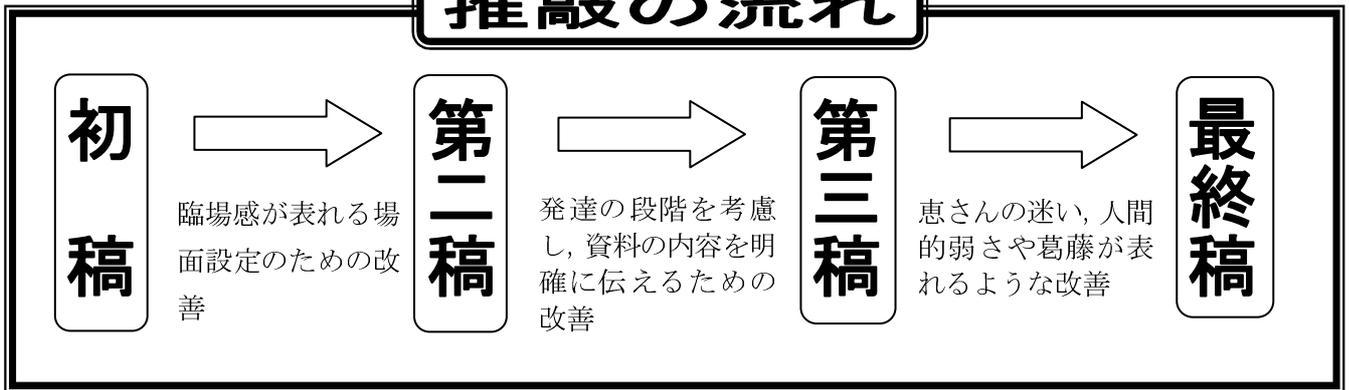
	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小さい頃からお父さんとバレーの練習をする、バレーが大好きな恵さん。	小学校でスポーツ少年団に入り、バレーを楽しみながら、練習に励む恵さん。	バレーの強い学校から転校の誘いがあり、迷う恵さん。	悩んだ末、転校を決意し、夢を果たしてオリンピック選手になった恵さん。

4コマ場面絵



- ⑤ 場面分けをもとに文章化する
- ⑥ 不要な文章や文言を削除する

## 推敲の流れ



### 初稿

#### 「ゆめにむかって」 —栗原恵選手のゆめ—

「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど……。バレーをつづけていますか？ 12才の恵より」  
 今、活やくしている栗原選手は、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。栗原選手は、このゆめをかなえたのです。

栗原選手は江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、

「ああ、もう、そうじゃない。」

とお父さんが言うと、栗原選手もくやしくておこってしまい、

「できない。もうやらない。」

と言って、練習をやめていました。でも、次の日になると、また、練習をいっしょにするというくり返しでした。

栗原選手が本かくてきにバレーボールを始めたのは、かの川小学校4年生の時。スポーツ少年だん、かの川フラワーズに入部してからでした。身長が高かったので、センターやレフトからスパイクを打ちました。スパイクを打つのが楽しかったので、かの川フラワーズの練習だけでは物足りなくて、家でも練習していました。お父さんがスパイクの練習用に物おきにボールをつるしてくれたのです。それをうちこむ練習を毎日しました。お父さんは、きんカトレーニング用にセラバンド（チューブ）のようなものまで用意してくれたので、スイングの練習にもはげみました。

栗原選手は、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。

私の一番の思い出は、バレーボールの事です。し合ではじゅん県体が一番楽しかったです。

2日目の試合では、八次というところとし合。見たところは私たちよりもすごいでした。やってみても強い。でもみんなでがんばってやっとなつてました。なつてたときは、うれしいしか思えませんでした。

そして、次の相手は、何でも完ぺきな可部南。し合かい始。なかなかサーブがとれません。だから、とうとう負けてしまいました。し合の終わりのふえの音が鳴るとガックリ……。ガックリといっしょに、くや



しなみだが出てきました。

B級の3人だったけど、自分たちにまん足です。このし合のことは、ぜったいわすれないと思うし、みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずっとバレーを続けていきたいと思います。

小学校の時に、みんなでバレーボールをする楽しさを体いっぱいを感じながらプレーできたことが、今の自分のもとになっていると、栗原選手はこのときのことをふり返っています。

栗原選手は、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。

そんなある日、強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。バレーボールのことだけを考えれば、やってみたい。上手になりたい。でも、転校すれば、大すきな両親、兄、小学校からつづく能美中学校での友だちとの楽しい生活、それら全てとわかれることになるのです。そのことを考えるとなみだがとまりませんでした。なきじゃくるすがたを見て、お父さんは、

「バレーをやりたいのは分かるよ。でも、そんなに泣いてまでするのか。できるのか。」

そう言われ、

「うん、行く。ぜったいに行く。」

反しやてきに決意を口にしていた栗原選手。お父さんに反こうしたわけではなく、

「そうだ、私は絶対にバレーがやりたいんだ。」

という気持ちが見えたのです。でも、

「行っちゃってから後かいするかもしれない・・・。」

と、お母さんには不安な気持ちをうち明けていました。いつまでもなみだのとまらずまよっている栗原選手に、お母さんは、

「めぐは、きつと行っても後かいするかもしれないし、行かなかつたら、それも後かいするんだと思う。どっちにしても後かいするんだつたら、どつちの後かいの方がいい？ よく自分で考えてごらんさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

栗原選手は、一人でじつと考えました。そして、自分の強い気持ちがはっきりわかり、中学校2年生の6月、転校することを決めたのです。

#### 栗原選手のその後の活やく

平成12年 : 高校は山口県防府市の三田尻女子高校に進学する。

インターハイ・国体・春校バレー優勝の高校三冠を経験する。

平成14年 : 高校三年生で全日本代表のメンバーにえらばれる。

平成15年 : Vリーグ（プレミアリーグ）NECレッドロケッツに入団する。

平成16年 : アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

: NECレッドロケッツを退団し、パイオニアレッドウイングスに入団する。

平成17年～ : Vリーグに出場し、最高殊勲選手賞などを受賞する。

平成18年 : 全日本代表にえらばれたが、左足種子骨骨折と診断され、約半年間のリハビリ生活を送る。

平成19年 : 全日本に復帰し、同年ワールドグランプリでは全9試合に出場し、ベストスコアラー部門で9位の成績をおさめる。

平成20年 : 北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年 : 全日本（火の鳥NIPPON）の副主将になる。

栗原選手の今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかつた。」と、え顔でむねをはって言えること。くいのないバレーボール人生のために、今できることをせいいっぱいがんばりたい。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもつたように今の自分を見て、バレー選手をめがず子どもたちにゆめをあたえてあげられるように、一人でも多くの人にバレーのみ力を知ってもらえるようにがんばること。自分が色々な人に助けられたので、今度は自分がアドバイスをあげられるような、大きな人になりたいということ。

栗原選手のゆめは、まだまだつづいています。



第2稿

臨場感が表れる場面設定のための改善

第2稿	改善点及びその理由
<p style="text-align: center;">「ゆめにむかって」 —栗原恵選手のゆめ—</p> <p>「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど・・・。 バレーをつづけていますか？ 12才の恵より」 今、活やくしている恵さん <b>ア<sub>1</sub></b> は、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心へのこのプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。</p> <p>恵さんは江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」とお父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、 「ボールをよく見て。」 「うんわかった。」 「手をのばして。」 「できないよ。」 <b>イ</b> 「ああ、もう、そうじゃない。」 「できない。もうやらない。」 と言ってケンカになり、めぐみさんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。でも、次の日になると、 「お父さん、いっしょに練習しよう。」 と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。 <b>イ</b></p> <p>恵さんが本かくてきにバレー <b>ア<sub>2</sub></b> を始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だん <b>ア<sub>3</sub></b> に入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。 <b>ウ</b> お父さんがスパイクの練習用に物おきにボールをつるしてくれたので、それを何度も何度も打ち込みました。</p> <p>恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>私の1番の思い出は、バレーのことです。 大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいでした。 <b>ア<sub>3</sub></b> やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、 <b>エ</b> やって勝てました。みんなの力です。 <b>エ</b></p> <p>そして、次の相手は、何でもかんぺきなチーム。 なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、 <b>エ</b> 負けてしまいました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ・・・。ガックリといっしょに、くやしなみだが出てきました。 B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。 <b>エ</b> このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずーっとバレーをつづけていきたいと思ひます。</p> </div>	<p><b>ア</b> 構成チェック票(例)項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>栗原選手という表現を、児童に親しみのある「恵さん」に統一した。(※以降、同様の表現は変更)</li> <li>「バレー」と「バレーボール」という言い方が混在しているので、児童が日常の生活で使用している「バレー」に統一する。</li> <li>団体が特定される名前を削除する。(かの川小学校、かの川フラワーズ、八次、可部南など)</li> </ol> <p><b>イ</b> 構成チェック票(例)項目⑦ 「叙述によく具象性を与えているか」</p> <p>練習場面の会話を具体的に加え、懸命に練習する恵さんの様子や練習中の思い、バレーが心から好きであることを考えていけるようにした。 また、直接、気持ちを表す表現(おこって)は削除したり、副詞句を活用して、恵さんのうれしさや楽しさを表現したりした。</p> <p><b>ウ</b> 構成チェック票(例)項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」</p> <p>中学年の児童にも分かりやすいように、専門的な用語をなるべく使わないようにする。(準県体、「センターやレフトからスパイクを打ちました。」「筋力トレーニング用にセラバンド・・・」など)</p> <p><b>エ</b> 構成チェック票(例)項目⑥ 「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」</p> <p>ボールをつないでいくよさ、カバーし合うよさ、みんなで最後まで戦うよさが表れるよう、文を追加する。この点をしっかり表現できていれば、転校するかどうかで悩むとき、友との別れのつらさも深まり、最後の恵さんの今の夢、一人でも多くの人にバレーの楽しさを伝えたいという思いにつながるかと考える。</p>



小学校の時に、みんなでバレーをする楽しさを体いっぱいを感じながらプレーできたことが、今の自分のもとになっていると、恵さんはこのときのことをふり返っています。恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。

そんなある日、ほかの県 **オ** の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないうさそいがありました。

バレーのことだけを考えれば、れん習がきびしくてもやってみよう。 **カ** やればもっと上手になれる。でも、転校すれば、大々のお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になるのです。 **カ** 小学校からずっといっしょにバレーをしてきたなかよしの友だちとも会えなくなります。どうしてよいかわからず、 **カ** なみだがとまりませんでした。なきじゃくるすがたを見て、お父さんは、

「バレーをやりたいのは分かるよ。でも、そんなに泣いてまでするのか。できるのか。」

そう言われ、

「うん、行く。ぜったいに行く。」

反しやてきに決意を口にしていた恵さん。お父さんにに反こうしたわけではなく、「そうだ、私は絶対にバレーがやりたいんだ。」

という気持ちが見えたのです。でも、

「行っちゃってから後かいするかもしれない・・・。」

と、お母さんには不安な気持ちをうち明けていました。いつまでもなみだがとまらずまよっている恵さんに、お母さんは、

「めぐは、きっと行っても後かいするかもしれないし、行かなかったら、それも後かいするんだと思う。どっちにしても後かいするんだったら、どっちの後かいの方がいい？ よく自分で考えてごらんさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

恵さんは、一人でじっと考えました。そして、自分の強い気持ちをはっきりわかり、中学校2年生の6月、転校することを決めたのです。

### 恵さんのその後の主な活やく **キ**

平成10年：兵庫県の中学校に転校する。

平成12年：山口県の高校に進学する。

平成14年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

平成16年：アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成20年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年：全日本（火の鳥NIPPON）の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっている本当によかった。」と、え顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように今の自分を見て、バレー選手をめざす子どもたちにゆめをあたえてあげられるようにすること。 **ク**

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

**オ**

構成チェック票（例）項目⑦  
「叙述によく具象性を与えているか」

転校先が遠いということで、恵さんの葛藤をより深く考えることができるよう「ほかの県」という言葉を加えた。  
さらに、遠いことを授業の中で補足説明することが望まれる。

**カ**

構成チェック票（例）項目③  
「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

中学年では、何を迷うのかが分かりにくいと考えた。そこで、転校すれば、さらに厳しい練習があること、家族と別れるということ、はたった一人の生活であること、どうしてよいかわからなくなっていることを書き加えた。  
また、両親、兄という表現も、普段児童が呼んでいるような言い方に変更した。

**キ**

構成チェック票（例）項目①  
「子どもの興味・関心に沿ったものであるか」

栗原選手の業績について、資料内容に大きくかわる中学・高校の進学先を入れるとともに、主なものにしぼる。

**ク**

構成チェック票（例）項目③  
「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

叙述が長すぎるので、小さい頃に恵さんがもった夢とつながる部分だけを残した。



第3稿

発達の段階を考慮し、資料の内容を明確に伝えるための改善

第3稿	改善点及び理由
<p style="text-align: center;">「ゆめにむかって」 —栗原恵選手のゆめ—</p> <p>「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど・・・。 バレーをつづけていますか？ 12才の恵より」 今、活やくしている恵さんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、 見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、この ゆめをかなえたのです。</p> <p>恵さんは江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの 選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボー ルで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。 小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の 子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、 「ボールをよく見て。」 「うんわかった。」 「手をのばして。」 「できないよ。」 「ああ、もう、そうじゃない。」 「できない。もうやらない。」 と言ってケンカになり、めぐみさんはできないことがくやしくて、練習をやめて しまいました。でも、次の日になると、 「お父さん、いっしょに練習しよう。」 と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。</p> <p>恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年 だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。<u>それが 楽しかったので、家でも毎日練習していました。</u> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ケ</span></p> <p>恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>私の1番の思い出は、バレーのことです。 大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいでした。やってみて も強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、やっと勝てまし た。みんなの力です。 そして、次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれ ません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしま いました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ・・・。ガックリといっ しょに、くやしなみだが出てきました。 B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽し いし合ができたからです。このし合のことは、ぜったいわすれません。み んなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみに して、これからもずーっとバレーをつづけていきたいと思ひます。</p> </div>	<p style="text-align: center;">改善点及び理由</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 20px;"> <p style="text-align: center;"><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ケ</span></p> <p>構成チェック票(例)項目⑤ 「適切な状況を設定しているか」</p> <p>状況を把握させたり、主人公の 恵さんの思いを考えさせたりす る上で必要ないものについては、 削除する。</p> </div>



コ

## 削除した部分

恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。

バレーのことだけを考えれば、れん習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。でも、転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になるのです。小学校からずっといっしょにバレーをしてきたなかよしの友だちとも会えなくなります。どうしてよいかわからず、なみだがとまりませんでした。なきじゃくるすがたを見て、お父さんは、「バレーをやりたいのは分かるよ。でも、そんなに泣いてまでするのか。できるのか。」

そう言われ、

「ううん、行く。ぜったいに行く。」

反しゃてきに決意を口にしていた恵さん。お父さんに反こうしたわけではなく、「そうだ、私は絶対にバレーがやりたいんだ。」

という気持ちが見えたのです。でも、

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない・・・。」サ

と、お母さんには不安な気持ちをうち明けていました。いつまでもなみだがとまらずまよっている恵さんに、お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？」サ よく考えてごらんなさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

恵さんは、一人でじっと考えました。そして、自分の強い気持ちがはっきりわかり、中学校2年生の6月、転校することを決めたのです。

恵さんのその後の主な活やく

平成10年：兵庫県の中学校に転校する。

平成12年：山口県の高校に進学する。

平成14年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

平成16年：アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成20年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年：全日本（火の鳥NIPPON）の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかった。」と、え顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように今の自分を見て、バレー選手をめざす子どもたちにゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

コ

構成チェック票（例）項目⑤

「適切な状況を設定しているか」

小学校時代の様子を振り返る部分は、「中学校でもまよわず・・・」で十分に把握できるので、必要ないと考え、削除した。

サ

構成チェック票（例）項目③

「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

「行っちゃってから・・・」という表現は、範読を聞いた時、「言っちゃってから・・・」と聞き間違える可能性もあると考え、「転校してから・・・」という表現に変更した。

中学年では、「後悔する」「行っても後悔、行かなくても後悔」という表現が分かりにくいと考え、表現を変更した。



最終稿

主人公の迷い、人間的な弱さや葛藤が表れるような改善

最終稿	改善点及び理由
<p style="text-align: center;">「ゆめにむかって」 —栗原恵選手のゆめ—</p> <p>「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど・・・。 バレーをつづけていますか？ 12才の恵より」 今、活やくしている恵さんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。</p> <p>恵さんは江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、 「ボールをよく見て。」 「うんわかった。」 「手をのばして。」 「できないよ。」 「ああ、もう、そうじゃない。」 「できない。もうやらない。」 と言ってケンカになり、めぐみさんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。でも、次の日になると、 「お父さん、いっしょに練習しよう。」 と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。</p> <p>恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。それが楽しかったので、家でも毎日練習していました。</p> <p>恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>私の1番の思い出は、バレーのことです。 大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいです。やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、やっと勝てました。みんなの力です。 そして、次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしまいました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ・・・。ガックリといっしょに、くやしなみだが出てきました。 B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。今まで練習をがんばったから、3セットまでねばることができました。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">シ</span> このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるといことがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずーっとバレーをつづけていきたいと思ひます。</p> </div>	<p style="text-align: center;">改善点及び理由</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p style="text-align: center;"><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">シ</span></p> <p>構成チェック票(例)項目① 「子どもの興味・関心に沿ったものであるか」</p> <p>楽しい試合ができた理由には、日々の努力を重ねている恵さんの姿がある。そのことを感じさせたいと考え、文集の元の文章「3セットまでがんばったねばり強さは、きびしい練習があったからこそだと思ひ。」を生かして、書き加えた。</p> </div>



恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレーをやるのかというさそいがありました。

(バレーのことだけを考えれば、練習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。)

(転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になってしまう。)

(小学校からずっといっしょにバレーをしてきた、なかよしの友だちとも会えなくなる。) ス

どうしてよいかわからず、恵さんはなみだがとまりませんでした。なきじやくすがたを見て、お父さんは、

「バレーをやりたいのは、わかるよ。でも、そんなにないてまでバレーをするのか。できるのか。」

と言いました。思わず、

「ううん、行く。ぜったいに行く！」

とこたえた恵さん。その時に、

(そうだ。私は、ぜったいにバレーがやりたいんだ。) ス

という気持ちがわかったのです。

その日の夕方、お母さんと恵さんはいつものように食事のじゅんぴをしていました。その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら、

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない……。」

と、ぼつりとつぶやきました。 セ お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？ 自分がどうしたいか、よく考えてごらんさない。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

その夜、恵さんは、部屋で一人じっと考えました。

そして、次の日の朝、ふすまを静かに開け、 セ

「私、やっぱり行く。」 ソ

と、お父さんお母さんに言いました。恵さんは、転校することを決めたのです。

こうして、恵さんはゆめにむかって第一歩をふみ出しました。

恵さんのその後の主な活やく

平成10年：兵庫県の中学校に転校する。

平成12年：山口県の高校に進学する。

平成14年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

平成16年：アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成20年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年：全日本（火の鳥NIPPON）の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっている本当によかった。」と、え顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように今の自分を見て、バレー選手をめざす子どもたちにゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

ス

構成チェック票（例）項目⑥

「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

恵さんの考えたことを説明するのではなく、（ ）内に書き、心の声として表現した。

セ

構成チェック票（例）項目⑦

「叙述に具象性を与えているか」

「その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら」「ぼつりとつぶやきました。」「ふすまを静かに開け」などの表現により、恵さんの不安、葛藤を表現した。

ソ

構成チェック票（例）項目⑤

「適切な状況を設定しているか」

人間的な弱さや葛藤、悩みが表現され、それを夢に向かう強い気持ちで克服する表現に変更した。これは、授業において、恵さんの決意の言葉「私、やっぱり行く。」をもとに、児童に考えさせていくことをねらったものである。



「ゆめにむかって」 くりはらめぐみせんしゆ 一栗原 恵 選手のゆめ一

「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど……。 バレーをつづけていますか？

12才の恵より」

今、活やくしている恵さんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。

恵さんは江田島市能美町えたじましのうみちょうの出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、

「ボールをよく見て。」

「うんわかった。」

「手をのばして。」

「できないよ。」

「ああ、もう、そうじゃない。」

「できない。もうやらない。」

と言ってケンカになり、めぐみさんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。

でも、次の日になると、

「お父さん、いっしょに練習しよう。」

と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。

恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。それが楽しかったので、家でも毎日練習していました。

恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。

私の1番の思い出は、バレーのことです。

大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいでした。やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、やっと勝てました。みんなの力です。

そして、次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしまいました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ……。ガックリといっしょに、くやしなみだが出てきました。

B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。今まで練習をがんばったから、3セットまでねばることができました。このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずっとバレーをつづけていきたいと思います。

恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。

そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。(バレーのことだけを考えれば、練習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。)

(転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になってしまう。)(小学校からずっといっしょにバレーをしてきた、なかよしの友だちとも会えなくなる。)



どうしてよいかわからず、恵さんはなみだがとまりませんでした。なきじゃくるすがたを見て、お父さんは、「バレーをやりたいのは、わかるよ。でも、そんなにないてまでバレーをするのか。できるのか。」

と言いました。思わず、

「ううん、行く。ぜったいに行く！」

とこたえた恵さん。その時に、

(そうだ。私は、ぜったいにバレーがやりたいんだ。)

という気持ちがわかったのです。

その日の夕方、お母さんと恵さんはいつものように食事のじゅんびをしていました。その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら、

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない・・・。」

と、ぼつりとつぶやきました。お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？ 自分がどうしたいか、よく考えてごらんなさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

その夜、恵さんは、部屋で一人じっと考えました。

そして、次の日の朝、ふすまを静かに開け、

「私、やっぱり行く。」

と、お父さんお母さんに言いました。恵さんは、転校することを決めたのです。

こうして、恵さんはゆめにむかって第一歩をふみ出しました。

恵さんのその後の主な活やく

平成10年：兵庫県の中学校に転校する。

平成12年：山口県の高校に進学する。

平成14年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

平成16年：アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成20年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年：全日本(火の鳥NIPPON)の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかった。」とえ顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように、今の自分を見てバレー選手をめざす子どもたちに、ゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

## 【参考文献】

栗原恵（2008） 「めぐみ」 実業之日本社

日本ドリームプロジェクト（編）（2009） 「アスリートの夢 26人のアスリート×きむ」 いろは出版